

## 聴覚障害児の視点取得の発達的特徴に関する研究 - 読書力と課題の違いによる検討 -

著者	金 恩河
著者別名	EUNHA KIM
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2017
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2016
報告番号	12102甲第8204号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00147619">http://hdl.handle.net/2241/00147619</a>

筑波大学審査学位論文（博士）

聴覚障害児の視点取得の発達的特徴に関する研究

—読書力と課題の違いによる検討—

人間総合科学研究科障害科学専攻

金恩河

## 目的

視点取得 (perspective-taking) は、他者の視点から、対象がどのように見えるか、考えるか、感じるかについて推測し理解することである。従来の視点取得に関する研究は、主に視覚的視点取得、認知的視点取得、情動的視点取得という3つの観点からなされている。

聴覚障害児の視覚的視点取得の発達は、言語的遅れのために、健聴児より2～3年ほど遅れること (Dwyer, 1983; Hoemann, 1972)、また、認知的視点取得と情動的視点取得は、子どもの言語環境に着目した研究が多く、聴覚障害のある親をもつ聴覚障害児の場合、健聴児と同等な発達を示すものの、健聴の親をもつ聴覚障害児の場合、視点取得の発達が遅れることが示されている (Courtin, 2000; Jackson, 2001; Lundy, 2002; Peterson & Siegal, 1999; Schick et al., 2007)。また、先行研究における子どもの言語的環境の違いの他に、子どものコミュニケーション能力、統語力や語彙力といった言語力が視点取得の発達に関係しているという知見が得られている (Bretherton & Beeghly, 1982; de Villiers et al., 2005; Nelson & Henseler, 1998; Peterson & Siegal, 2000; Schick, et al., 2007)。しかし、聴覚障害児の中で、言語力の違いに直接焦点をあて、言語力の違いと視点取得の発達との関係を検討した研究はみられない。なお、聴覚障害児の言語力の指標として読書力が広く用いられている現状を踏まえ、本研究では読書力を言語力の指標として用いた。

また、健聴児の場合、視覚的、認知的、情動的視点取得において、難易度の低い課題では、幼児期に80%以上の正答率を示すことが報告されているが、聴覚障害児の場合、その発達の遅れを報告する知見が多い。このことから、聴覚障害児について検討する場合は、児童期の子どもを対象に難易度の高い課題も含めて視点取得全体の発達の状況について検討する必要がある。

さらに、健聴児を対象とした研究では、非言語課題より言語課題の遂行が容易であるという知見 (Hollebrandse et al, 2014; Zaitchik, 1991) がみられるが、聴覚障害児を対象とした研究では、言語的遅れにより、非言語課題の遂行が言語課題より容易であるとされている (Figueras-Costa, & Harris, 2001; Gale et al., 1996; Woolfe et al., 2002)。これらの知見から、聴覚障害児は、課題の解決方略が健聴児とは異なる可能性が考えられるが、先行研究での言語課題は非言語的的刺激に言語的説明を加える形式であったので、文章による言語課題と、実物や絵による非言語課題の提示により、両者を比較検討した研究はまだ行われていない。

同時に、視覚的、認知的、情動的視点取得の関連については、主に認知的視点取得と情動的視点取得の関係については検討されているが、3つの視点取得間の相互関連について直接的な検討はなされていない。

このことから、本研究では、聴覚障害児における視覚的、認知的、情動的視点取得について、課題の言語的特性と読書力の相違にみられる各視点取得の発達的特徴を明らかにすることを目的とした。そのために、特別支援学校（聴覚障害）小学部に在籍する聴覚障害児を読書力高群と読書力低群に分け、非言語課題と言語課題の遂行時の視点取得を発達的に捉えるとともに（研究1～3）、これら3つの視点取得の相互の関連についても検討を行った（研究4）。

## 方法

対象児：研究1～4の対象児は、音声言語を主なコミュニケーション手段とする先天性重度聴覚障害児であった。小学部児童を低・中・高学年群（1・2年生、3・4年生、5・6年生）に分け、さらに各群について、教研式全国標準読書力診断検査（Reading-Test）の5段階評定に基づき、1～2段階を読書力低群、3～5段階を読書力高群とした（Table 1）。なお、各学年群内の読書力高群と読書力低群は、読書力に有意差が認められ、平均聴力レベルには有意差が認められなかった。

課題：研究1～3の各研究では、難易度の異なる2種類の課題を設定し、研究1の視覚的視点取得では第一段階課題と第二段階課題、研究2の認知的視点取得では一次的誤信念課題と二次的誤信念課題、研究3の情動的視点取得では知覚的感情課題と文脈的感情課題を用いた。視覚的視点取得の非言語課題の提示では写真と玩具を用い、認知的視点取得と情動的視点取得の非言語課題ではストーリーのある単数あるいは複数の絵カードを用いた。それぞれの言語課題は非言語課題の内容を文章化して提示した。

手続き：非言語課題と言語課題ともに、練習課題により教示の理解を確認した後、本課題を実施した。それぞれの教示は対象児の主なコミュニケーション手段に合わせて、原則音声、文字を用い、対象児が求める場合、対応手話を一緒に提示した。両課題の実施による学習効果を排除するため、非言語課題を実施した1ヶ月後に言語課題を実施した。

研究4の視点取得間の関連については、研究1～3の結果を用いて、非言語課題と言語課題ごとに、3つの視点取得の相互関連について検討した。

## 結果と考察

研究1の視覚的視点取得の結果では、読書力高群は非言語課題と言語課題のいずれの課題において、低学年から高い成績を示し、先行研究の健聴児と同等な成績を示した。さらに、非言語課題の解決では、課題を言語化しながら考えている様子がみられ、課題を言語的に処理する方略を用いる特徴がみられた。一方で、読書力低群は、非言語課題と言語課題ともに、低学年では低い成績を示すものの、学年が進むにつれ、視覚的視点取得の成績が向上することが明らかとなった。これらのことから、年齢に伴う日常生活での様々な経験が視覚的視点取得能力の向上に繋がる可能性が示唆された。

研究2の認知的視点取得の結果では、読書力高群は非言語課題と言語課題のいずれの課題において、低学年から高い成績を示し、先行研究の健聴児と同等な成績を示した。一方、読書力低群は非言語課題と言語課題のいずれの課題において、低学年で最も低い成績を示し、高学年にかけて成績の向上がみられた。読書力低群の低学年では、言語発達や認知発達がまだ十分ではなく、結果的に低い成績を示すものの、学年が上がるにつれ、他者との関係性を経験することにより、言語や認知が発達し、成績が向上したと考えられる。しかし、読書力高群に比べて、ほとんどの課題と学年で低い成績を示した。絵で提示された非言語課題においても読書力の違いによる差がみられたことは、言語力が高い児童は、課題に含まれる関係を言語的に処理することで、効果的に解決できたのではないかと考えられる (Jacques & Zelazo, 2001; Gordon & Olson, 1998; Zelazo, 1999)。さらに、読書力が高いほど認知力も効果的に働き、他者の考えの推測を促したと考えられる。

研究3の情動的視点取得の結果では、読書力高群は非言語課題と言語課題の知覚的感情課題では、低学年からすでに高い成績を示しており、また文脈的感情課題においても、健聴児と同様に中学年以降で高い成績を示した。一方、読書力低群も、知覚的感情課題では、非言語課題と言語課題ともに、すべての学年群で読書力高群と同等な成績を示した。しかし、文脈的感情課題では、低学年から高学年にかけて成績の向上が示されるものの、読書力高群に比べて著しく低い成績を示し、高学年でも低い成績に留まっている様子がみられた。読書力の低さと、それに伴う認知力の遅れが考えられ、他者の感情を二重に推測することが求められる文脈的感情の理解においては (Broomfield et al., 2002; Naito & Seki, 2009)、著しく低い成績を示したと考えられる。

研究4で行った視点取得間の関連の検討から、非言語課題と言語課題ともに、全児童を対象にした相関関係とパス解析では、非言語課題と言語課題に共通して、視覚的・認知的・

情動的視点取得の3つの視点取得の相関関係が認められた。さらに、読書力群別のパス解析を課題別に行った結果、特に言語課題において、読書力低群では①一次的誤信念課題から文脈的感情課題への直接的な正のパスが、また、読書力高群では②一次的誤信念課題から二次的誤信念課題を経由した文脈的感情課題へのパスが示され、読書力高群と読書力低群では異なるパターンが示された。文脈的感情理解では、二重の推測が必要であり (Broomfield et al., 2002; Naito & Seki, 2009)、読書力低群では②のパスがみられないことから、高学年になっても人や状況によって他者の感じ方が異なることの理解が難しく、一般的な感情で回答してしまったのではないかと考えられる。

本研究では、読書力高群は先行研究の健聴児と同等の成績で視点取得を獲得していること、読書力低群は知覚的に解決できる視点取得課題以外では読書力高群より視点取得の獲得が遅れることが明らかになった。しかし、読書力低群も年齢に伴う発達傾向も示唆された。課題の違いについては認知的、情動的視点取得では、読書力高群と読書力低群ともに非言語課題と言語課題において、ほぼ同等な成績を示すことが明らかになった。